女王陛下のイザベラ・バード

横松和平太

イザベラ・バードという言葉が、いつから頭の中に住み始めたのか定かではない。
昨日今日のことではないのは確かだが、何となく奥地紀行という言葉も漂っていた。
東海道五十三次の旅や、列島横断・塩の道の旅を終え、次は何処へ行こうかと考えた時昔読んだはずの〝イザベラ・バード〟の〝日本奥地紀行〟を歩きたくなっていたのだった。

十三峠越え

関連本を含めざっと読み返してみた。バードは横浜に上陸し、東京から北に向かい日光、会津を抜け新潟に向かっていた。そこから東北地方に足を向け山形県に入り、米沢、山形、新庄と北上し、秋田県を踏破、青森から北海道の函館に渡り最後は平取(びらとり)のアイヌの集落を訪ねている。1878(明治11)年の5月から9月にかけてのことだった。当時彼女は47歳の独身のおばさんであった(但し条件付き婚約中)。欧米人としては小柄な体(151cm)でしかも持病(脊椎側湾症)持ち、健康回復の療養のため、〝日本には新奇なものがとびきり多くあり、興味がつきないはずだという確信に惹かれて〟ひとりぼっちでやって来たという。

135年前に彼女が歩いた道を辿ってみるのが面白いと、ルートを詳しく調べてみた。歩くのなら昔の面影を残す旧街道が良いのではと。明治以来の近代化から取り残された道なら、静かで風情のある街道歩き、山歩きができるのではと思ったのだ。こうした条件にあてはまりそうな所は余りなかった。しかし会津から越後、越後から米沢、最上から秋田への道なら愉しめそうであった。中でも越後・米沢街道通称十三峠越えの道に興味を惹かれた。標高こそあまり高くはないが、残雪や新緑の飯豊・朝日の山々を眺めつつ、村から村へ古道や里山を辿れそうであった。そこでまず、この十三峠越えを歩いてみることに。
イザベラ・バードが歩いた道を追体験する〝ツイン・タイム・トラベル〟を！
実際十三峠越えは、期待にたがわぬ興味深い道だ。風情ある旅を愉しめる道である。
だが歩くにつけ、私の関心はイザベラ・バードという人物そのものと、彼女が世界を歩き旅したヴィクトリア朝という時代にも引寄せられていったのだった。

スコットランドの牧師の娘

イザベラ・バードは1831年10月、イギリスはスコットランドの高位聖職者の二人姉妹の長女として生まれている。キリスト教の布教と医療伝道活動が彼女の生涯のベースとなるのは、この環境があってこそである。日本奥地紀行の旅で、新潟、秋田、函館各地でも宣教師達の情報とネットワークが重要な支えとなっている。
彼女の評伝によれば、子供の頃から事の因果関係を素早く見抜き、感じたことを率直に臆せず表現したという。又、知的好奇心も旺盛で行動的であった。この特質は「奥地紀行」の文章にもよく現れている。イザベラの父は牧師としては不遇であった自らの思いを託し彼女の資質を見抜き、男の子として彼女を育てたという。

彼女が生きた時代は、ヴィクトリア女王の時代と重なっている。女王は1819年生まれで1837年に即位、亡くなったのは1901年。イザベラ・バードは1904年72歳で亡くなった。ヴィクトリア女王の時代はまさしく大英帝国が頂点の時代であり、七つの海を支配した。世界中で植民地を経営し、中国・アジアにも覇権を拡げたのは周知のところである。
軍事力をバックにして外交官と宣教師と貿易商をセットにし、太陽の沈まぬ帝国を各地に築いて行った時代であった。

父親は、彼女が22歳の時にカナダと北アメリカ東海岸での7ヶ月の海外生活に送り出した。資金を与え、乗馬の訓練もさせたようだ。その3年後には北アメリカ2000マイルの一人旅もやっている。最初の旅の旅行記は『イギリス女性のアメリカ紀行』(1856年)として出版され、注目を集めた。ヴィクトリア朝の時代にあっては、中上流階級では良妻賢母があるべき女性像であり、女性の地位が意外な程まだまだ低かった。いわゆるフェミニズムは萌芽の時代でしかなかったが、底流には女性の政治的・社会的進出への願望、自分を高めたいという欲求のエネルギーが昂まりつつある時代であった。家庭に縛られずに外に飛び出す生活への憧れとして旅行記が人気を集めた。こうした潮流を見通し、彼女に目を付けたのが英国のJ・マレイ社であった。同社は旅行ガイドブックの出版を得意とし、イザベラ・バードはそのプロデュースに乗って海外への旅行体験に乗り出したのである。
オーストラリア、ニュージーランドから渡った、ハワイ諸島での登山体験等を伝えた『サンドイッチ諸島での半年』(1875年)は女性層から支持されベストセラーとなった。日本にやって来る前に既に旅行家、紀行文作家としてすでにある程度の評判を勝ち得、その名を知られるようになっていた。1873年、既に40歳代になっていたがロッキー山脈では、ならず者のような男との恋もあり、4000m峰にも登頂する生活を体験していたのだ。

レディ・トラベラー

1870年代から第一次世界大戦前夜にかけてのこの当時、イザベラ・バードのようにヴィクトリア朝のイギリスから世界に飛び出した女性達がいた。植民地を中心に世界各地を旅して活躍した人たちだ。彼女達はレディ・トラベラーと呼ばれたという。
彼女達に共通していたのは、中年女性のひとり旅(大半は独身者)で、旅の資金は自己負担であったことである。彼女達が出掛けたのは、欧州以外の当時〝野蛮〟と云われた地域である。インド大陸、アフリカ大陸、アジア極東であった。前時代、同時代の男性探検家の旅のように未知の世界への冒険ではなかったが、苦労やトラブルもいとわない旅だった。トラベルの語源はトラブルと同じである。周遊を意味する〝ツァー〟ではなく〝トラベル〟を目指したのだ。トマス・クック社はアルプス登山やナイル川クルーズの旅をパック・ツァー商品として売出し、観光旅行の大衆化を始めていた時代である。自転車、登山、鉄道旅行がブームであり、旅のノウハウ、マニュアルを満載したガイドブックが生まれ、初心者でも楽しめた時代が始まっていた。彼女達はそれらとは一線を画する存在であった。

イザベラ・バードが日本を目指していた頃、実は日本へやって来たレディ・トラベラーが他にもいた。マリアンヌ・ノースは前年(1877)の11月に来日。横浜、東京、神戸、京都

を旅し、植物画が得意であった彼女は画で日本を描いた。但し日本の寒さに体調を悪化させ、著作は残さず去っている。彼女はイザベラ・バードのことを「病弱で自己顕示欲が強く、冷たい感じのする女性だ」と評したらしい。レディ・トラベラーのもう一人のライバル、ゴードン・カミングは同じ年の9月に来日しているが、中国探検のついでに骨董漁りと観光に来ただけらしい。彼女と出会ったイザベラ・バードは「彼女はきれいな服を着て、とても丈夫そうに見えました」と書いている。ライバルを見る目はお互いに冷やかだ。

バードが公使館に滞在中に出会った当時17歳のC・クララ嬢からは「いやな老嬢…彼女は本を書くつもりで、誰にでもしつこくいろいろきき出そうとするので、誰もそばへ行きたがらない人物なのだ。」と、彼女の日記で辛辣に書かれた。いつも子供は率直すぎる。彼女の友人パット・バーは「…実際の彼女に会って、それが小柄でずんぐりした、澄んだ眼差しをした低い声の中年の女性で、英国の牧師の長女としての育ちに相応しい優雅で穏やかな態度をしていることを知って、多分驚いたことであろう。」「後に結婚したビショップ氏からは〝虎の食欲と駝鳥の消化力〟を備えていると言われていた」ことを伝え、彼女を「せんさく好きで落ち着きのない、大胆で意志の強い性格」と評している。

J・マレイ社の出版戦略

18世紀は冒険・探検の時代であったが、19世紀後半には観光旅行の時代が始まる。スエズ運河と米国大陸横断鉄道は共に1869年に完成、一気に世界が狭くなっていた。フランスのジュール・ベルヌが『八十日間世界一周』を発表したのは1872年のことだ。小説の中では主人公達も、上海から横浜(1859年開港)にやってくる。近代ツーリズムの創始者と言われるトマス・クックが、初の世界一周旅行の客を連れて日本に立寄ったのが、やはり1872(明治5)年のことだった。東から太平洋航路で横浜に上陸し、〝最も美味しい牛肉〟を食べ、〝瀬戸内海の美しい景観〟に呆然とした。クックは〝日出ずる魅惑の帝国〟日本にすっかり魅せられている。日本の伝統文化と西欧から急ぎ学びつつある近代文明の融合が気に入ったからだ。クック・ツァーの一行は各地でジャポニスムのお土産をしっかり買い込んでいったようだ。クックはこれらの体験を『タイムズ紙』に手紙の形で寄稿した。上流階級では世界旅行とジャポニスムがブームの時代となっていたのだ。

J・マレイ社の次なるイザベラ・バードの売り出しは、『女性のロッキー山脈生活記』(1879年)の出版であり、旅行記作家としての地位の確立にあった。既に、前の旅行記の出版で彼女の観察力や表現力を評価していた同社は、彼女を旅行記作家として育てたかったはずだ。旅先からの手紙・書簡のような形式はある種女性による海外特派員レポートのようであり新鮮であり、シリーズ化を狙っていたと思われる。その出版準備の間に、日本への旅を勧めた。C・ダーウィンに相談をして日本行きを勧められたという説もあるが、J・マレイ社は彼女を他のレディ・トラベラー達と差別化し、一歩先をゆく旅行記作家として育てたかったのであろう。シリーズ化にあたってのポイントは目的地の選び方にもあった。大英帝国が既に植民地化に成功していた世界から一歩踏み出した地域を狙いとしたかったのではなかろうか。まだ白人女性は足を踏み入れていない未踏の地を選びたかった。その点で、日本はおよそ10年位前に開国し、西欧文明を受け入れ始めたばかりの未知の魅力に

溢れた国だった。明治11年の日本は、西南戦争の翌年、来日直前には大久保利通暗殺事件があったばかり、開化の本格化路線が定まった頃であった。日本のことをイザベラ・バードもきっと耳にし、書籍や新聞・雑誌を読み、関心を寄せていたはずである。J・マレイ社は彼女に日本行きを勧め、紀行文執筆を依頼した。冒険と旅の本として出版したかった。だが彼女から一度は断られている。彼女の思いとはズレがあったのかも知れない。彼女には彼女なりの思いがあり、出版社との合意のないまま日本への旅に踏み出したのだ。

本当の日本

彼女が日本で妹のヘンリエッタにあてた手紙の第一信で「私は本当の日本の中に入っていきたい。(I long to get away into real Japan)」と書いた。が、彼女にとっての本当(real)の日本とは、一体何だったのだろうか？東北・北海道への未踏路の旅が、蝦夷地の体験がそれだったのだろうか？。次の話には興味深いものがある。

「J・マレイ社と彼女の間の書簡によれば、バードが日本で最も楽しかった旅行は、蝦夷へのものでなく、伊勢神宮への旅だったことが記されている」(『バード 日本紀行』)。

東北・北海道での旅の体験の記述には実に興味深いものがあることは言うまでもない。中でも当時の蝦夷地の旅路、アイヌの集落での滞在記が充実している。彼女の鋭い観察眼と率直な表現力がいかんなく発揮されている。アイヌ民族の描写では、「…温和で、気立てがよくて、従順である。日本人とはまったく異なった民族である。肌の色はスペインやイタリア南部の人々に似ており、顔の表情や礼儀・好意の表し方は東洋的というよりはむしろ西洋的である。…」と、親しみを寄せている。蝦夷地の旅全体への言葉として、「蝦夷において、旅行者であるわたしは本州で嗅ぎ取ったより自由な雰囲気があるのに気づいた。」(『イザベラ・バードの日本紀行』の「蝦夷に関するノート」)とある。

1880年初版の原本の扉には「蝦夷の原住民並びに日光及び伊勢神宮訪問を含む国内旅行物語」の副題がある。函館から東京へ戻ってから、関西方面、伊勢路の旅にでかけているのだ。J・マレイ社による日本の旅の出版化に彼女が同意したのは、蝦夷地の旅を終えてからのことだと云う。日本の未踏路の旅を書くだけでなく、日本での旅全体の体験記を書く条件で出版社と折り合ったのであろう。〝本当の日本〟に対する彼女の本音は、伊勢路の旅にあったとも言える。西欧のモノマネでしかない、横浜のような〝美しさに欠けた無秩序〟な近代化途上の日本には魅力は感じず、さりとて未開の地に対してはキリスト教会者としてそれなりの感慨しかなかったのでは？。やたらとアイヌに対し未開、未開人を連発し、文明社会からの目線も目立つのだ。出版社の要請に応えて、未開の未踏路を歩く旅にも満足し旅行記も書いた。だが、伝統的な文化が残された伊勢路のような半開の日本の旅が、実は一番好ましく愉しかったと、手紙の中で思わず本音を洩らしたのだろう。

根は旅好きで医療伝道に関心の深い宗教家なのだ。

出版社の立場からすれば〝未開の地を女性がひとりで始めて旅をする〟体験記に価値があった。だから、初版本の成功のあと、関西伊勢旅行、東京、新潟、函館といった居留地の観察、日本の教育、医療、産業等の近代化の状況、伝道活動の考察の記述部分を省略し〝未踏路の旅〟に絞った普及版を出版した(1884年)。高梨謙吉が翻訳した本、『日本奥地紀行』はこの普及版であった。普及版はJ・マレイ社のかねてから出版戦略によるもので

あり、目的は未踏の地の冒険と旅行の本として売ることにあった。彼女が楽しかったという伊勢路も確かに未踏の地であり、一般の旅行コースから外れていたが冒険的な面白さはなかった。それまでも同社は彼女に対し、より多くの人に読んでもらうための方策としていくつかのアドバイスを行なってきていた。例えば、本のタイトルの工夫、軍事や宗教的な世界に深入りしすぎないこと、統計や専門的でジャーナリスティック部分を削除してコンパクトにすること等である。そうすることでより本は実際よく売れたのだ。さすがに、出版マーケティングのプロだけのことはある。日本の奥地への旅を要請したのはJ・マレイ社であり、彼女はそれに応えたということだ。結果ベストセラーになり、旅行作家としての名声は確かなものとなった。印税収入も莫大になっただろう。

それにしても、日本と蝦夷地に関する情報を彼女は如何に入手にしたのであろうか？旅の情報源と彼女の旅をサポートした人々について、次に考えてみたい。

英国公使館

女性がひとりで未踏の地を旅するにあたっては、色々な人や組織の存在なしに考えられない。ヴィクトリア朝に生きたイザベラ・バードの場合を考えてみたい。

まず誰が彼女をサポートしてくれたのか？である。日本に来るにあたって在日の英国人宛に紹介状を40通以上も書いてもらったという。時の英国公使ハリー・パークス夫妻に紹介状を書いたひとりはアーガイル公爵。この人物はヴィクトリア女王の四女と結婚した政治家で、後にカナダ総督を務めている。大英帝国のエリート達との親交がある程、彼女には名声があったようだ。東京では英国公使館に滞在し、ハリー・パークス夫妻のみならず彼の人脈と政治的な力で、彼女の旅は実現していく。ちなみに本のタイトル〝Unbeaten Tracks in Japan〟(日本の未踏路)の名付け親はハリー・パークスだという。

旅行制限が厳しかった時代であったが、「事実上制限なしの通行証」を日本政府から入手出来るよう尽力もしてくれた。パークスにしてみれば、未だよく情報が入って来なかった東北・北海道の未踏路の情報を得られることを期待してのことだろう。ロシアの南下政策が懸念されていた時代である。ロシアの進出を牽制し、極東の市場を獲得するのが大英帝国の戦略だった。その最前線を任されている外交官として情報収集に手を打つのは当然のことだった。彼女が現地で集めてくる情報に期待したのだ。パークス夫人にも本当に世話になったようで、初版本の巻頭には「故パークス夫人に、感謝と敬意をこめて本書を捧げる」とある位である。蛇足だが、夫人は富士山に登った最初の外国婦人とか。

英国公使館には、パークスの部下としてアーネスト・サトウがいた。幕末の1862年に最初は通訳生として来日以来、日本の歴史・宗教・文化を研究し、さらには日本国内各地を幅広く旅行、登山家としても著名な日本語に堪能な日本通であった。バードの来日時36歳の青年、日本人妻と暮らしていた。後に1895年には特命全権公使として再度来日、1906年清国全権公使として外交官を引退するまで、大英帝国の極東外交のキーマンであり続けた男である。バードとの関係は晩年まで途切れなかった。

日本アジア協会

イザベラ・バードはサトウから日本アジア協会を紹介してもらったであろう。この組織は1874(明治7)年横浜に生まれ、外交官・お雇い教師、技師・実業家・宣教師等在日欧米人による日本研究団体である。その機関誌(紀要)編集の中心がサトウであった。彼女の来日前に同誌に発表されていた地誌や紀行文の中には、東北・北海道方面のものもあった。しかし、彼女が考えたルートに役立つものはほとんどなかった。英国人土木技師R・ブラントンが1876(明治9)年に作成した日本大地図を旅行に持参したとされる。資料を見てみたが、しかし情報は大雑把で不正確なものでしかなかった。

新潟経由、山形県、秋田県、を経て函館へ渡るというルート計画はどのように構想されたかといえば、宣教師のネットワークの存在が大きいようだ。横浜では既にヘボン夫妻に世話になり、新潟、秋田、函館ではそれぞれ宣教師を訪ね滞在し世話になっている。医療伝道に深く関心のあった彼女は、各地の実情を観察している。宣教師のいた街では、つかの間の西洋風の生活でリラックスできたことだろう。越後・米沢街道越えのルートの選定についても、新潟から函館への船便の事情を聞かされて止む無く陸路をとったようだ。

C・Hダラスの「置賜県収録」(1876年)が奥地紀行の中の米沢方面の記述に関係しているとの説があったので、訳書を入手し読んでみた。結論としては、置賜平野の一般的な知識として参考にした程度のものと思える。何故ならば、同書は米沢へのルートとして奥州街道の福島から板谷峠を越えての道を紹介している。街道案内地図も付いているが、十三峠越えの道のについては「確かに十三ある峠の中で、三つは小さな丘陵にすぎないが、四つか五つは、思わず背筋が寒くなるような峻険な峠である。」とある。彼は伝聞で書いたようだ。米沢平野の美しさをエデンの園、東洋のアルカディアと讃えた有名なフレーズは、あくまでイザベラ・バードのものである。(三十年振りという天候不順の中の峠越えからの開放感から出た言葉、実感かもしれないが)

サトウはJ・マレイ社との間で、日本の旅行のガイドブックを出版する企画を温め、1881(明治14)年よりハンドブックスタイルの『日本旅行案内』シリーズの形で実現した。この本の中で、会津から新潟、米沢から山形と秋田へのルートについては〝一部を除いてこの旅程の資料はバード嬢の『日本奥地紀行』とC・Hダラス氏の置賜県に関する論文による〟と明記してある。互いに助けられたのだが、その背後に出版社の影もみえる。

J・マレイ社は世界各国の旅行案内書を刊行し人気を集めていたが、日本編は情報不足のまま準備できないでいた。当代の人気レディ・トラベラーを派遣し、日本研究の第一人者サトウと組ませて紀行文を出し、更に案内本も出版した。凄い企画力ではなかろうか。

通訳兼召使い伊藤鶴吉

イザベラ・バードは勿論日本語ができなかった。サトウが編集した英和口語辞典(1876年刊)を旅に持参したが、彼女の旅には通訳として雇った伊藤(イトー)の存在が大きかった。

〝とても小柄で、がにまたで瞼が重くたれていて、愚鈍に見えた〟この若者を抜きに彼女の北日本、蝦夷地の旅は語れない。ただ英語が話せただけではなく、旅の手配万端を要領よくこなした。彼の本名は伊藤鶴吉といい日本の観光ガイド業の草分け的存在であったことが研究者により明らかにされてきた。それによれば、伊藤を雇ったことが東北・北海道

の旅に如何に役に立ったかが頷ける。それは伊藤の前歴のことである。彼は、英米の公使館にボーイとして働いたことがあり実践的英語力があった。イザベラ・バードに出会う前年の1877(明治10)年春から10月にかけイギリス人のC・マリーズに雇われていた。日光、仙台、盛岡、青森と陸路を旅し北海道に渡り函館、札幌、十勝方面を通訳兼従者として旅していた。マリーズが何者かと云えば、大手園芸業ヴィーチ商会が日本・中国に派遣したプラントハンターである。ヴィクトリア朝のこの時代、貴族や富豪達は庭園を美しい花や珍しい樹木で飾りたいという熱気に溢れていた。それらをもとめて世界中に調達しに出かけた商売人や学者等の人々をプラントハンターと称した。パークスやサトウ達外交官も又そうであったという。日本は針葉樹の種類が豊富であることに目を付けたらしい。

日光と青森、北海道は行ったことがある土地だった。それに植物採集の手伝いを通してある程度の知識があったことも彼女の植物観察に役立ったようだ。

イザベラ・バードとの旅を終えた函館で、図らずも？中国の採集旅行から戻っていたマリーズと再会。伊藤は彼女と心ならずも別れ、再度札幌・十勝方面のハンティングに出かけたようだ。その後バードとの再会があったかどうか？未だ資料は見つかっていない。

伊藤鶴吉らしき人物が写っている写真があったのには驚かされた。一つはマリーズと一緒に植木屋(時期、場所は特定出来ていない)で、「ガーデナーズ・クロニクル」という園芸雑誌に出ている。もう一つはH・クラフトの旅行記『ボンジュール・ジャポン』の中に数枚あった。イザベラ・バードとの旅の4年後の1882年。世界一周旅行の途中に日本で長期の観光旅行をしたフランスのシャンパン財閥の御曹司の一行の通訳兼ガイドをしたらしい。写真では確かに特徴が似ているし、イトーという名前も同じだ。伊藤鶴吉なのかどうか確定はできないが、テキパキとした仕事振りの描写からいかにも彼らしく思える。

函館に集まった外国人

8月13日に上陸し、函館の領事館にイザベラ・バードは落ち着いた。そこで彼女はどのように情報を収集したのだろうか。アイヌ民族に会い、その生活を体験するにはどうしたしたらよいか？まずは資料だが、彼女手持ちの『日本アジア協会紀要』にはC・ブリッジフォードという軍人が寄稿した「蝦夷の旅」という文章があった。少しは参考にしたのではなかろうか？(残念ながら実物を小生は未読)。

この頃函館にはたくさんの外国人がやってきた。前年からは、かの伊藤鶴吉の元の雇い主プラントハンター、マリーズやアイヌ研究者のJ・バチュラーが来ている。この年7月には英国の地震学者J・ミルン、8月にはかの有名な米国人動物学者E・モースが。だが彼女にとっては、おそらく宣教師デニング夫妻からの情報とその存在が大きかったはずだ。1874(明治7)年から函館で伝道活動をはじめ翌々年には平取にすでに入り、アイヌ語の研究も始めていた人物だった。彼から平取行きを勧められたのではなかろうか。

平取への旅の途中では、H・シーボルトの一行と出会っている。この人物はかのP・F・シーボルトの息子である。父の研究のあとを継いでアイヌ研究者としても業績を残している。この時はオーストリア・ハンガリー公使館員として同国の軍人クライトナー及びフラ

ンス公使館のディスバッハの三人連れだった。彼らは平取に先行して滞在してきており、イザベラ・バードと情報交換もしている。

　明治政府による北海道開拓は、薩摩出身の黒田清隆が功罪取り混ぜて有名である。彼は米国を開拓事業のモデルに選んだという。開拓使顧問に農務省長官H・ケプロンを4年間招き、農学校のクラーク博士など多くの米国人が活躍した。米国中心の北海道開拓について、イザベラ・バードは「蝦夷に関するノート」でやや批判的に報告している。英国領事をほめ、英国と組めばもっとうまくできるのに！と言いたいかのようだ。それもあってか米国人ケプロンは、彼女の本を読んで非難をしている。「蝦夷の〝人の通わぬ道〟は、万事彼女の本をフィクションで埋め、将来の史実を作るのに役立っている。 世界をさっと歩いて、このような情報を歴史に加える…」バードの記述は〝未開のアイヌにすっかり目を奪われ〟た単なる旅行者のものでしかないと。

　1860年に初めて来日し、通算20年以上函館で暮らしたT・ブラキストンは、もっと手厳しい非難を彼女に向けている。この人は元々英国の軍人にして探検家だが、ブラキストン線でも有名な動植物研究家である。北海道では実業家として開拓にも貢献している。彼は、その著書『蝦夷地の中の日本人』の中で、バード女史の動植物や土壌・農業についての解説、アイヌの習慣や風俗についての話は「信用に値しない」とか情報が不正確で「他の人からの〝盗品〟がたくさんある」とまで書いている。この人は、日本から帆船をチャーターして太平洋を横断してアメリカに去ったとか。函館の在留外国人社会との付き合いや日本との商売に問題を抱えていたとも云う。どちらかというと狷介（けんかい）な人物だったらしい。

　イザベラ・バードにしてみれば日本の研究書を書いたつもりはないのだから、ウザかったことだろう。

ザ・グレートゲーム

イギリスに戻った彼女には波乱の人生が続いた。バード家の主治医だった ビシップ氏との結婚、妹ヘンリエッタの病死、更に病に倒れた夫の看護と死去。本人の体調も不良だった。海外への長い旅に出かけたのは約10年後の1889年のことだった。医療伝道を志し、外科の看護師の訓練も受け、妹と夫のための記念病院を設立を目指した。このインドのカシミール、チベットのラダックへの旅は、久し振りの冒険的な旅行だった。翌年には、ペルシャの南から紅海を経て、トルコ、アルメニア、黒海へと約1年に渡る長く困難な旅をした。

　ヴィクトリア朝のこの時代、中東からアジアでは英国とロシアは熾烈な勢力争いをしていた。チベット、アフガニスタン、ペルシャ、など中央アジアはグレートゲームの舞台と云われる。探検家ヤングハズバンドがカラコルム越えをしたのもこの頃だ。この旅の途中では、インド軍主計局情報部のソウヤー少佐と同行し、イスラム圏の「悪党の部族」に囲まれたキャンプも体験している。彼は軍事目的の調査活動をし、彼女は旅行記録の提出を求められ協力したという。まさしくグレートゲームの地を旅したのだ。1891年『ペルシァとクルディスタンの旅』を出版、注目・評価された。1892年、ロンドンとエジンバラで王立地理学会特別会員になり、講演も行なっている。女性で初めてのことだった。更に翌年には、63歳にしてヴィクトリア女王の謁見を許されるまでになったのである。

大英帝国のジャーナリスト

イザベラ・バードが再び極東の地にやってきたのは、1894(明治27)年のことである。時あたかも日清戦争の頃であった。1896年まで数回に渡り、朝鮮半島から満州、ウラジオストック、中国の四川省の奥地まで旅している。医療伝道活動の支援や視察の目的もあった。日本には前後5回滞在しているが、最初の時と違って資料があまり明らかにされていない。ただ、旧知のサトウはこの時駐日公使に昇進しており、彼の日記には彼女の名前が幾度となく登場している。中禅寺湖の別荘で、宣教師のビカステス夫妻とか外交官とか軍人と交遊している。「ビショップ夫人とお茶を飲んだが、朝鮮についての原稿を書くのに追われているようだ」とあるように、日本を休養や執筆活動の為のベース基地のようにしていたようだ。朝鮮では、日本によって謀殺された閔妃とも親しくしたとか。『朝鮮紀行』では朝鮮、ロシア、日本の関係に言及し、英国の政治的・経済的影響力の後退を憂えている。中国では主に伝道活動の調査が目的だったようだが、彼女はこの時までに写真術を学んでおり『極東の旅』には貴重な写真が豊富に収録されている。これらの本以外にも、激動する朝鮮半島や中国の現場を取材し、文章と写真で新聞にも寄稿している。最初の日本訪問では紀行文作家であったが、この時は時代を先取りしたジャーナリストであった。ロシアの脅威に対し日英が同盟関係を深めるのも、国際政治の舞台裏も見たのである。出版社もJ・ニューンズ社に変更している。いつまでも紀行文作家でいたくなかったのだ。

イザベラ・バードは英国の情報エージェントだったという説(金坂清則、渋谷光夫氏など)がある。ペルシャでの軍人との行動や、この時の行動は英国政府をバックにした軍事外交エージェントであったとの見方である。最初の旅も、日本の情報収集が目的だったとか、本の出版にあたって日本政府に関する情報発信を制限したのでは？といった意見もある。しかしこれは余りにもうがった見方ではなかろうか？。パークスにしろサトウにしろ外交官はおよそ情報収集活動が本業である。彼らとの交遊からとか、資料が未公開だからとから彼女がエージェントであった、とするのは言い過ぎではないか。

小説家と情報活動の関係はよく知られたことである。例えば、S・モームには自らの体験に基づいた『秘密諜報員』という小説がある。『第三の男』のG・グリーン、『007』のI・フレミング、ジョン・ル・カレ等、いづれも〝MI 5/6〟での情報活動経験がある。ロシアに対する諜報活動はヴィクトリア朝から始まってはいたが、当時は未熟なものでしかなかったらしい。イギリスにこれらの組織(SIS＝秘密情報部)が発足したのは、1909年のこと、彼等の活躍は第一次世界大戦以降のことだ。ドイツへの脅威からだとか。

少なくとも最初の日本の旅まではJ・マレイ社の出版戦略が背景にあったと思いたい。彼女は確かにスパイ小説家と同じく鋭い観察眼と豊かな表現力という資質があり、政府への協力を求められたかもしれない。しかし、二度目の極東の旅はヴィクトリア女王陛下の治世下、王立地理学会のフェロウとなり大英帝国のジャーナリスト、宗教家として活動したのだと、私は考えたいがどうであろうか。

ヴィクトリア女王は1901年1月、イザベラ・バードは1904年10月に亡くなったのだが、その頃極東では、日英同盟(1902年)を背景に日露戦争が迫っていた。

彼女は最初の来日時の本(1880年)の「日本の現況」の章で既にこんなことを書いている。「新しい改革を実行し、本当の進歩とにせの進歩をうまく区別すること。平和外交政策を死守すること。」そうすれば、永続的な成功も期待できると指摘している。「高潔さと国民の立派さという真の道義を備えた日本は、…アジアの光明となりうるかもしれない。」が、キリスト教の信仰がないままでは、その進歩は失敗すると危惧している。イザベラは病床にあっても、ロシアを相手にした日本の戦争の行方に心を奪われていたとか。いっとき日本は成功したが、やはり挫折の道を歩んだのは歴史にみる通りである。日本は平和外交を死守できなかった。その原因がいづれにあったのかは置くとして、中々鋭いことを言っているではないか。

「太陽が沈むことのない国」から、「日出ずる国」にやってきたこの〝おばさん〟は「しつこい…日本を馬で旅行している奇妙な婦人」(『クララの明治日記』)ではあったが見識溢れるジャーナリストとしてヴィクトリア朝を生き抜いた人なのだ。　　(了)

参考資料:

◉『日本奥地紀行』(高梨健吉訳 /1973年、2000年版) 『イザベラ・バード 朝鮮紀行』(時岡敬子訳/1897年)『イザベラ・バード旅の生涯』(O・チェックランド、川勝貴美訳/1995年)『バード　日本紀行』(新異国叢書・楠家重敏他訳/2002年)『イザベラ・バード 極東の旅』(金坂清則 訳編/2005年)『イザベラ・バードの日本紀行』(時岡敬子訳/2008年)『「日本奥地紀行」を歩く』(金沢正脩/2010年)『イザベラ・バード紀行「日本奥地紀行の謎を読む」』(伊藤孝博/2010年)『イザベラ・バードよりみち道中記』(伊藤隆博/2010年)『イザベラ・バードの山形路』(渋谷光夫/2011年)『明治日本旅行案内』(A・サトウ編著、庄田元男訳/1996年)『アーネスト・サトウ公使日記』(長岡祥三訳/2008年)、『チャールズ・H・ダラス―米沢英学事始―』街道案内付 置賜県収録(松野良寅/1982年)『明治初期の蝦夷探訪記』(高倉新一郎 序文/1977年)『日本とヴィクトリア朝英国』(松村昌家編/2012年)『英国と日本―第六章イザベラ・バード 』(パット・バー、長岡祥三訳/1999年)『パークス伝―日本駐在の日々』(F・ディキンズ、高梨健吉訳1984年)『遠い崖』(萩原延寿/2008年)『女たちの大英帝国』(井野瀬久美恵/1998年)『世界を旅した女性たち』(D・ミドルトン、佐藤知津子訳/2002年)『クララの明治日記』(C・ウィットニー、一又民子他訳/1996年)『ケプロン日誌-蝦夷と江戸』(H・ケプロン、西島照男訳/1985年)『蝦夷地の中の日本』(T・ブラキストン、近藤唯一訳/1979年)『北海道の歴史』(田端宏也/2000年)『小シーボルト蝦夷見聞記』(H・V・シーボルト、原田信男他訳注/1996年)『イトウの恋』(中島京子/2005年)『ボンジュール・ジャポン』(H・クラフト、武者小路真理恵 訳、後藤和雄編/1998年)『プラントハンター』(白幡洋三郎/2005年)『トマス・クック物語』(P・ブレンドン、石井昭夫訳/1995年)『スパイだったスパイ小説家たち』(A・マスターズ、永井淳訳/1990年)

◉「ブラキストンとケプロンのイザベラ・バード批判をめぐって」
(『弘前大学大学院地域社会研究科年報　第5号』高畑美代子/2008年)
「イザベラ・バードの通訳兼召使い・イトーについて」(『東日本英学史研究』第8号 高畑美代子/2009年)
「イザベラとヘンリエッタについて」 (『東日本英学史研究』第8号 橋本かほる 2009年)

◉「 米沢ダラス協会公式WEBサイト」他多数。